





MIE UNIVERSITY 三重大学広報委員会

表紙イラストレーションタイトル『撫子』 表紙デザイン 岡田 博明

(三重大学教育学部助教授)

このイラストレーションは、三重大学のある三重県に古くから伝わるテキスタイルパタ ーンの『伊勢型紙』をモチーフにして制作しました。

この型紙のタイトルは『撫子』で、江戸時代(19世紀初期)に制作され、ゆかた等のパ ターンとして使用されたようです。

The cover page design is entitled : "NADESHIKO", Designer : Hiroaki Okada

Designer . Hiroaki Okaua

(Associate Professor, Faculty of Education, Mie University)

The cover page illustration was produced by using as a motif a traditional textile pattern called "Ise Pattern". This is a pattern typical to Mie Prefecture where Mie University is located.

This paper pattern is called "NADESHIKO". It was created during the Edo era, at the beginning of the 19th Century, and was used as a pattern for yukata (informal summer kimono) printing.

目 次 Contents

1.	大学間協定	
	General Agreement for Academic Cooperation and Exchange	
	・ピエール・エ・マリー・キューリー大学(パリ第6大学)	[フランス]
	Pierre et Marie Curie University (Paris VI) [France]	
	・バレンシア州立工芸大学 [スペイン]	
	Valencia Polytechnic [Spain]	
2.	伊勢湾文化総合研究センター構想推進シンポジウム	渡辺悌爾3
	The Symposium for Promoting the Planning of the Ise Bay	Teiji WATANABE
	Culture and Society Research Center	
3.	タイ・コンケーン大学医学部と三重大学医学部との	鎮西康雄
	学術交流と学生交換	Yasuo CHINZEI
	The Academic Exchange Agreement and the Student Exchange	
	Project between the School of Medicine, Mie University, and	
	the Faculty of Medicine, Khon Kaen University (Thailand)	
4.	第1回日韓ジョイントルーメンシンポジウム	小林泰男
	――ルーメン研究の現在と未来――	Yasuo KOBAYASHI
	The 1st Joint Sympojium of Japan and Korea on Rumen	
	Metabolism and Physiology	
	Present and Future of Rumen Reserch	
5.	三重大学の外国人研究者	アタナシオス・ニコライデス …9
	Reports by Overseas Reserchers at Mie University	Athanassios NICOLAIDES
6.	留学生の目	陳 正樑10
	Foreign Student's Viewpoint	CHEN ZHENG LIANG
7.	肺塞栓症国際シンポジウム・三重会議	11
	International Symposium on Pulmonary Embolism in Mie	
8.	第29回日本膵臓学会大会	
	1998年日本消化器関連学会週間	
	The 29th Annual Congress of Japan Pancreas Society	
	Digestive Disease Week-Japan 1998 (DDW-Japan 1998)	
9.	三重大学概要	
	Outline of Mie University	

英文は日本文の要約です。 The English is a condensed version of the Japanese.



ピエール・エ・マリー・キューリー大学(パリ第6大学)[フランス] Pierre et Marie Curie University (Paris VI) [France] [L'Université Pierre et Marie Curie (Paris VI)]

協定締結年月日:1996年6月26日 交流概要:

三重大学とパリ第6大学(ピエール・エ・マリー ・キューリー大学)は、学術交流協定を結んでいる。 内容は、両大学研究者の共同研究等の交流および学 生相互の交流をうたっている。さて、協定締結後約 一年が経過し、三重大学武村学長をはじめ研究担当 妹尾副学長、澤工学部長、パリ第6大学との共同研 究者工学部清水、渥美経理課長がパリ第6大学学長 室に J. レメール学長を訪ねた。パリ第6大学を簡 単に紹介しよう。別称ピエール・エ・マリー・キュ ーリー大学と呼ばれる。医学・理学・工学のマンモ ス理系大学である。学生数約38,000名、研究・教育 者約2,700名、過去四年間の論文・著書などの出版 物約15,000件である。場所はセーヌ河河畔、シテ島 のノートルダム寺院の対岸、有名なカルチェラタン の一端に位置する。大学本部の高層ビルディング22 階に学長室があり、パリ市内を一望することができ る。

Date : June 26, 1996 Outline of Exchange :

General Agreement for Academic Cooperation and Exchange between Mie university and Pierre et Marie Curie-Paris 6-university have been completed in order to foster international collaboration research work between both universities as well as students exchange.

The President of Mie university, Prof. Yasuo TAKEMURA, the Vice President Prof. Masafumi SENOO, the Dean of Faculty Engineering, Prof. Goto SAWA, and Prof. Yukimura SHIMIZU visited Pierre et Marie Curie University (Paris VI) on July 1st and 2nd, 1997, and participated in the general meeting for the academic cooperation and exchange together with the President of Pierre et Marie Curie University, Prof. J. Lemerle.

The collaboration research work between the two universities has started, and fruitful perticipation by researchers from both universities, as well as dynamic students exchange, is expected to increase in the near future.



J.レメール学長との記念写真 Memorial picture with President J. Lemerle.

バレンシア州立工芸大学(スペイン) Valencia Polytechnic [Spain] [Universidad Politecnica de Valencia]

協定締結年月日:1996年7月4日 交流概要:

海岸線と山岳に囲まれた南北に長い地形、地中海 性の温暖な気候風土、古い歴史など、極めてよく似 た特色を持つ三重県とバレンシア州は5年前から友 好姉妹都市の提携を結んでいる。この間、それぞれ の代表団の交換、芸術祭の開催など活発な交流事業 が行われてきた。この縁で、本年7月には武村学長 を代表とする本学の代表団がバレンシア工芸大学を 訪問し、本学との間に学術交流協定が締結された。 この大学は、19世紀末から今世紀の初めにかけて設 立された美術学校と工業技術学校を起源とするバレ ンシア高等工芸学院から昇格したもので、1971年に 設立されている。学部のほかに短期大学部および大 学院を含めて、学生数29000名、教職員数2000名以 上、通常の工学、農学に関連するものから美術、社 会・経済に至るまで35学科の規模を有している。特 にお国柄を反映して文化財、建築に関連する分野が 充実しており、キャンパス内のいたる所に彫刻・絵 画が氾濫している。学内には、合気道の道場があっ て試技を披露してくれたり、学部長の部屋に刀剣類 が飾ってあったりで、日本の文化にも極めて強い関 心を持っている人たちが多い。来年1月にはニエト

Date : July 7, 1997 Outline of Exchange :

Mie Prefecture and Valencia State in Spain signed a Friendship Sister Provinces Agreement 5 years ago. During the period, many exchange projects have been actively carried out. In this July, the President of Mie University, Prof. Takemura and a delegation from Mie University visited Valencia Polytechnic and concluded an Academic Exchange Agreement between both universities.

Valencia Polytechnic was established in 1971, based on Valencia School of Industrial Technology and School of Art, founded at the end of 19th century. This university, which includes a Junior College and a Graduate School, has over 29,000 students and more than 2000 teaching staffs. It has 35 departments such as engineering, agriculture, art, social science and economics. Based on Hispanic and Catalonian culture, Valencia Polytechnic is especially known in the field of cultural assets and architecture.

Next January, the President and a four-member delegation from Valencia Polytechnic are scheduled

学長をはじめとす る4名の代表団が 本学を訪れる予定 であり、また、本 学に情報工学の分 野で留学を希望し ている学生もおり、 これを契機として 両大学の交流が盛 んになるものと思 われる。



学術交流協定に署名する両大学の学長(バレンシアにて) Presidents of both universities sign Academic Exchange Agreement in Valencia.

to visit Mie University. Also, students in Valencia Polytechnic hope to study at the information department in Mie University. Exchanges between both universities are expected to become active.

伊勢湾文化総合研究センター構想推進シンポジウム The Symposium for Promoting the Planning of the Ise Bay Culture and Society Research Center

三重大学では数年前から、「伊勢湾文化総合研究セン ター」(仮称)を設置したいという構想があり、一昨年 までに設置準備委員会から『伊勢湾地域とその文化』、『交 流概念から見た伊勢湾文化』という2冊の研究報告書が 刊行されました。平成8年度は更に学内世論を盛り上げ るために、センターの必要性、センター構想のコンセプ トおよび、センターへの期待などを議論しようという趣 旨で、武村学長、妹尾、藤原両学長補佐、西村人文学部 長をはじめとする諸先生方のご出席を得て2度のシンポ ジウムを開催しました。この模様は、1冊の記録にまと めて刊行し、学内外の関係者にお届けさせて頂いたとこ ろであります。以下、2度のシンポジウムの概要をレビ ューし、論点を要約的に紹介することにします。 (1)第1回シンポジウム:平成8年12月19日(木) 午後

於三翠ホール・小ホール

総合テーマ:「地域研究と大学の役割」

基調報告

①高山 進(教育学部)

「地域環境管理と大学の役割」

②菅原洋一(地域共同研究センター)

「地域共同研究センターの現状と地域文化研究」 ③渡辺悌爾(人文学部)

「伊勢湾地域研究のネットワーク化と政策研究」 冒頭武村学長より「細分化されてきた学問が地域研究 という場面で総合化される必要性」が述べられ、研究者 としてセンター構想への期待が表明されました。続いて の3つの基調報告を受けて、今井正次工学部教授の司会 In Mie University, the Planning of Ise Bay Culture and Society Research Center is being promoted by the preparation committee for promoting the planning since several years. In the last fiscal year, a Symposium for Promoting the Planning were held twice, on last December and this March. The main aim of the Symposium was to push on the planning in order to make up the Research Center at Mie University in the near future. In these meeting we intended to clarify the needs and concepts for the Research Center.

The outlines of these meeting is summarized as follows :

 The first Symposium : 19th (THU.) December 1996, Mie-University Sansui-Hall

The discussing theme: Regional Studies and Role of University,

The detail of discussions :

- ①The subjects of regional studies and their possibillities,
- ⁽²⁾The significance of regional studies in Ise-Bay Areas and the surrounding regions,
- (3) The role of Mie-University about regional studies Ise-Bay Areas and the surrounding regions.
- (2)The second Symposium: 17th (MON.) March 1997, Mie-University Sansui-Hall

The discussing theme : The Visions for Regional Society and Regional Studies,



第2回シンポジウム The Second Symposium.

によって、①地域研究の課題と可能性、②伊勢湾地域で の地域研究の意味、③伊勢湾地域の地域研究に関する三 重大学の役割、などのテーマをめぐって活発な討議が行 なわれました。

(2) 第2回シンポジウム:平成9年3月17日(月)

午後、於三翠ホール・小ホール 総合テーマ:「地域社会と地域研究の将来像;地域と 研究者の幸せな出会いとは?」

基調報告

①秋山道雄(滋賀県立大学環境科学部助教授)

- 「琵琶湖をめぐる地域研究」
- ②目崎茂和(人文学部教授)

「地域研究における三重大学の役割」

今回も、開会に当たって武村学長が「地域連携と地域 研究の必要性からセンター構想への期待感|を表明され ました。今回はとくに学外から基調報告に秋山道雄滋賀 県立大学助教授、討論者に寺口瑞生松阪大学助教授の参 加を得たことを特筆したいと思います。2つの基調報告 の後、高山進教育学部教授の司会によって、①地域研究 の学術的可能性、②地域研究の現場に関わる研究者のス タンスなどを主なテーマとして討議が行なわれました。 秋山先生の報告が琵琶湖研究所でのプロジェクト研究の 経験をベースにしたものであり、また討論者としてお招 きした寺口先生も同研究所の研究に関与された経験を披 瀝されたので、討論は非常に盛り上がりました。また、 このシンポジウムには大学関係者だけでなく県下各層か らも参加があり、とくに第2回には三重県の原田副知事 が出席され、センター構想への期待を込めたご挨拶をい ただきました。

二回にわたるシンポジウムの討議は、次のように集約 できるでしょう。

- I. 地域研究は今日、時代、社会の要請として必要性が 高まっている。
- Ⅱ. その研究方法は、学際的総合研究であり、それを促進する何らかの組織が必要とされる。
- Ⅲ.研究者の共同作業による地域社会への先見的な政策 提言能力の蓄積が望まれている。

こうした共通認識を基底に置きながら、センター構想 の具体化に向けて学内世論のより一層の盛り上がりを切 に期待するものであります。



シンポジウムの討論者 Commenters in the Symposium.



第2回シンポジウムにおける原田副知事の挨拶 HARADA Mie Prefecture Vice President.

The detail of discussions :

- ①Academic Possibilites for Regional Studies,
- ⁽²⁾How to do research on regional studies in the real fields ?

The essence of the two symposia can be summarized as follows:

- I There is an increasing demand for regional studies recording to the needs of modern society in the present ages.
- II The studies should be conducted as a comprehensive joint-research among researches from various fields.
- The results from these studies are expected to be of high standards, and to have some constructive impacts in the policy making process of the regional society.



筆者プロフィール
 渡辺 悌爾
 人文学部教授(経済学修士)
 1945年生

Profile **Teiji WATANABE** Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences (Master of Economics) Born in 1945

タイ・コンケーン大学医学部と三重大学医学部との学術交流と学生交換 The Academic Exchange Agreement and the Student Exchange Project between the School of Medicine, Mie University, and the Faculty of Medicine, Khon Kaen University (Thailand)

タイの東北部、北から東を流れるメコン川に向いた緩 やかな台地平野の真ん中にコンケーン市がある。人口は 20万少々、タイでも最も貧しい地方の中心都市である。 バンコックから行くと田舎町の感は拭えない。ここにコ ンケーン大学があるが、大学は立派である。タイ政府が 地域格差をなくす政策の目玉として設立したのがこの大 学である。歴史は浅いが、文系理系殆どあらゆる Department を擁する総合大学だ。キャンパスは森の中にあり、 地図でみると市域の中心部と殆ど同じ広さがある。へた をすると迷ってでてこれないくらい広い。

コンケーン大学医学部と三重大学医学部とが研究交流 の実績を基に学術交流協定を結んだのは、1994年の夏の ことである。そもそもこの地方には種々の風土病がある。 1992年から3年間、これらの地方病を対象として、三重 大医学部の数講座が中心になって科研費による学術調査 を行った。この時、コンケーン大学医学部の多くの先生 方の協力を得て、大きな成果を上げることができた。そ して、プロジェクト終了後も個別の研究協力が継続され、 その必然的な帰結が学術協定であった。

この学術交流協定の威力は大きかった。大学間協定を ベースに科研費の大学間協力研究を申請し、これまでに 2件採択され、現在協力研究が進行中である。更にコン ケーン大学付属病院の脳神経外科や泌尿器科の医師の研 修受入と出向指導、それに学術振興会やタイ政府の援助 による病理部や輸血部の検査技師の受入も行ってきた。 また来年はコンケーン大から研究者の受け入れも予定さ れているし、三重大からも文部省短期研修制度による研 究者の派遣が決まり、2ヵ月間コンケーン大学での研究 The Acadmic Exchange Agreement between School of Medicine, Mie University and Faculty of Medicine, Khon Kaen University (KKU) in Thailand, was signed in 1994. Based on this agreement we have developed relationship and cooperation between two faculties in the research and clinical fields. Some medical doctors and laboratory technitians have been accepted for a short term training and for research collaboration. Now, a plan to send a researcher to KKU near future is being devised.

We applied research grants for Monbusho based on our"agreement"and two research projects were funded for three years. Presently those research projects are progressing, and a joint symposium on the collaborated projects with KKU is being planned for next summer.

We also have started the student exchange project between two universities. Nine students of Mie University in total have visited Khon Kaen for about two weeks, both in 1996 and 1997. They had various kind of activities both within KKU and out of the campus. We are planning to accept some students from KKU for short term and long term programs next March.

I hope these exchanges of doctors, researches and students, and the friendly relatonship between two universities will develop more and more.



コンケーン大学医学部長先生を表敬訪問 Visiting Dean Faculty of Medicine, KKU.

が予定されている。さらに、来年の夏は共同研究の内容 をテーマとした共同シンポジウムも企画されようとして いる。

このように医師や研究者の人的な交流や学術交流が 年々拡大して、両学部の関係は益々深く強固になってき ている。これと平行して、学生の交流も昨年になって開 始され、三重大学生のコンケーン大学訪問が実現した。 学生のコンケーン大訪問研修プロジェクトの計画に三重 大学国際交流基金が予算を付けてくれたのである。学部 内で公募をしたところ6名の応募(6年生3人、5年生 1人、1年生2人)があって、全員が訪問を果たした。 今年は2年目で、やはり同基金の援助を得て4年生3人 の訪問が実現した。いずれも教官の科研費による調査団 に同行するという形をとって、約2週間滞在した。

学生たちは内科や外科の外来・病棟の見学、外科手術 の見学、コンケーン大学学生の臨床実習やチュートリア ル授業への飛び入り参加などの研修に加え、学生同士が 自由に話し合う交流会も持った。また、研究調査に同行 して農村部の医療施設や農家の訪問も行うなど、ぎっし りのスケジュールをこなしてきた。さらに、コンケーン 市内の家庭でホームスティもさせて頂き、タイの人々の 普段の生活に触れる機会を持つこともできた。週末には 遺跡の見学や市内の市場での見物やショッピングを楽し むことも忘れなかった。

お世話をして頂いたからにはお世話をしてお返しした い。来年3月には1・2年生を中心にした短期滞在(10 日間)と5・6年生対象の長期(4週間)滞在の学生の 受け入れを予定している。短期の学生は病院や施設等の 見学・日本文化体験を、長期の学生は大学病院での研修 を主な内容として計画している。

三重大学での受入で一番困るのは学生の宿泊施設がな いことである。コンケーン大学の外部学生の受け入れの 態勢(カリキュラムや宿舎)は良く整備され、多くの実 績を持っている。それに比べて三重大学の受け入れ態勢 の貧弱さには驚くばかりである。三重大学の努力ででき る部分とできない部分があろうが、今後こういった交流 を発展させるためにももっと条件整備をはかる必要があ るだろう。

日本の大学がこれまで国内外の他の大学や関連機関と の関係にあまり目を向けて来なかったように思う。学生 にしろ研究者にしろ外にでて外から学ぶことの重要さ・ 大きさの認識があまりなかったことに原因がある。コン ケーン大学に限らず、広く世界の大学と学生や教官の交 流が盛んになって相互理解・協力が更に発展し、外から 刺激を受け学ぶ機会がもっと増えた方が良いと思ってい る。



ノンルア地方病院を訪問(スタッフの方々と) Visiting Non-Rua Regional Hospital. (Together with the hospital staffs)



三重大学生とコンケーン大学生の交歓 Exchange of friend ship between both students of Mie University and KKU.



筆者プロフィール
鎮西 康雄
医学部教授(農学博士、医学博士)
1944年生

Profile

Yasuo CHINZEI Professor, Faculty of Medicine

(Doctor of Agriculture, Doctor of Medicine) Born in 1944

第1回日韓ジョイントルーメンシンポジウム ——ルーメン研究の現在と未来—— The 1st Joint Symposium of Japan and Korea on Rumen Metabolism and Physiology ——Present and Future of Rumen Research——

日本ルーメン研究会・韓国ルーメン機能研究会の共催 による『第1回日韓ジョイントルーメンシンポジウム』 が10月2~4日に志摩郡賢島プラージにて開かれた。ル ーメンとは反すう動物の第一胃のことであるが、そこに 生息する微生物の機能やそれらと動物自身との相互関係 を含め、反すう動物の栄養生理全般をよりよく理解し、 動物生産の向上をはかろうとする研究(ルーメン研究) が60年代に欧米の酪農先進国ではじまった。その後世界 各国へ研究熱はひろまり、5年おきの大きな国際学会が もたれるようになり現在に至っている。今回、極東地域 の研究交流を目的としてはじめての日韓ジョイント集会 を企画した。両国以外に、イギリス、カナダ、フィリピ ン、スリランカ、ブルガリアから合計79名が参加し、"ル ーメン研究の現在と未来"のメインテーマのもと、基調 講演6題、一般口頭発表32題、ミニワークショップでの 話題提供2題が、3日間にわたり展開された。

実は情報交換以外にもうひとつの目的として、日本の 若手研究者に英語で口頭発表してもらう機会を提供し、 それになじんでいってもらうという配慮があった。学生 をふくめ11人もの若手研究者がそれに挑戦してくれたこ とは、喜ばしい限りである。一部、質疑応答でてまどる 場面もみられたが、若い時の恥は金をはらってでもかく べしとの格言があるように、今後の成長が楽しみである。 学会は来春に退官をひかえた本学星野教授(家畜生産 学)の opening address ではじまり、初日は日韓それぞ The 1st Joint Symposium of Japan and Korea on Rumen Metabolism and Physiology was held at Kashikojima Plage on October 2-4, 1997. The symposium was organized by 5 professors of Mie University with cooperation of the Japanese and Korean Societies for Rumen Study. The financial support was provided by the Mie University Foundation for International Exchange, and the Program for Promotion of Basic Research Activities for Innovation Technologies in Biosciences. The purpose of this meeting was to exchange scientific information on rumen function and also to deepen the relationship among scientists in Far East region.

Seventy-nine scientists participated from 7 countries, including Japan, Korea, UK, Canada, Phillipines, Sri Lanka and Bulgaria. The symposium consisted of 6 keynote lectures, 32 general papers in oral and 2 lectures in mini-workshop. The keynote lectures focused on history and future perspective of rumen research in both Japan and Korea, and also reviewed popular research fields such as ruminal methanogenesis, protein metabolism and application of molecular biology. General papers covered a wide range of interests, such as ruminal digestion and its modelling, rumen microbial physiology and rumen microbial genetics. In the workshop, two professors from Mie University talked about the possibility



牛のルーメン(第一胃)より単離された嫌気 性繊維分解カビ Anaerobic and cellulolytic fungus isolated from the rumen of cattle.



稲ワラを採食中の松阪牛 Matsusaka beef cattle feeding rice straw.

れのルーメン研究の歴史、昨年の英・仏ジョイント集会 の内容紹介のあと、ルーメン内でのメタン産生とメタン 菌の解析、タンパク消化のコントロール、家畜生産への 遺伝子工学の応用など、今ホットな領域での基調講演が あり、活発な質疑応答があった。2日目は32題を一気に こなした。本学遺伝子施設苅田助手のルーメン菌のセル ラーゼ遺伝子解析の研究は多くの聴衆の興味をひいてい た。その他若手の積極的な貢献は上述のとおりである。 その夜は新鮮な魚介類に舌鼓をうちながらのパーティー となり、tea room に場所をかえての midnight session は 翌2時すぎまで盛況であった。ここでも日韓若手研究者 の活発な社交が目についた。最終日には本学後藤助教授 (農業生産技術学)と大宮教授(応用微生物学)が、「ル ーメン内繊維消化の人為的制御の可能性」と題したミニ ワークショップで話題提供し、飼料となる植物の形態、 細胞、分子レベルでの研究成果をふまえた提言、ならび に分解者であるルーメン微生物の分子育種の可能性と問 題点について議論した。

大会は様々な雑務に協力してくれた本学学生の多大な 貢献のもと、終始スムースに進行した。最後は韓国側の 代表であるソウル大の Prof. J. K. Ha から、次回のジョ イントシンポジウムは来年の6月ソウルで開催するとの アナウンスがあり、また今回の集会はプログラムおよび 実際の進行とも非常によく organize されたものであり、 深く感謝するとのお誉めの言葉をいただいた。口だけで なく、韓国産最高級焼酎をあとで個人的にいただいたの も、本シンポジウムの真の成功とそれへの感謝のあらわ れだと勝手に解釈している。その後はバスを借り上げ、 松阪の有名肉牛肥育場と本学遺伝子実験施設を見学して おひらきとなった。

反すう動物は植物質を飼料とすることから、近未来に 危惧されている家畜とヒトとの食糧競合は本来皆無のは ずである。ただ、生産性(収益性)を追求すると、穀物 給与の割合が高まるのが、今現在の状況である。長期的 視野にたち、本来の食性とその能力を最大限に活用する 技術の模索、あるいはそれらを調節してやる手法の開発 が急務である。その根幹をになうであろうルーメン微生 物の機能開発は、飼料開発と同時進行しており、両者は 可能な限り研究交流をもつべきだと考えているのは私だ けではないだろう。その意味で最終日のワークショップ はイギリスロウエット研究所 Wallace 博士の言葉どおり、 "まとをえた企画"であった。このような集会を実現でき たのは、三重大学国際交流基金および生物系特定産業技 術研究推進機構からの資金援助によるところ大である。 ここに謝意を表する。 of manipulating ruminal fiber degradation.

In the closing ceremony, Professor Ha, from Seoul National University, appreciated our organization of the meeting and stated that the next one will be held in Seoul, Korea, in June, 1998.



星野貞夫教授による開会の辞 Opening address by Prof. Hoshino.



日・韓・加からの若手研究者 Young scientists from Japan, Korea and Canada.



筆者プロフィール
 小林 泰男
 生物資源学部助教授(農学博士)
 1956年生

Profile Yasuo KOBAYASHI Associate Professor, Faculty of

Bioresorces (Doctor of Agriculture) Born in 1956

三重大学の外国人研究者

Reports by Overseas Reserchers at Mie University

三重大学での一年間

私の名前はアタナシオス ニコライデスといいます。 昨年8月に来日し、日本学術振興会の外国人特別研究員 (JSPS Fellow)として、富岡秀雄教授(工学部分子素 材工学科)の研究グループで研究を行っています。この 研究グループでは、有機反応に含まれる反応性中間体に ついて研究をしております。この中間体は、一般に非常 に寿命が短いので、一般的な手法では研究することがで きず、多くの学際的な技術を用いることが必要です。例 えば、有機合成の手法を用いて中間体を発生しうる前駆 体を合成し、そこから発生する中間体の構造を決め、さ らにその複雑な挙動を理解するために、最新の分析手段

やコンピュータを用いた 計算化学が使われます。 これだけの手法を全て駆 使して研究している研究 グループは、世界でもほ んのわずかですが、それ が、ここ三重大学で行わ れているということは大 変興味深いと思います。

私はギリシアのアテネ 大学を卒業し、アメリカ のワシントン大学で学位 を取得した後、オースト ラリアの国立オーストラ リア大学で博士研究員と



実験室にて At the laboratory.

して過ごしてきました。これらの各国各大学と三重大学 を比較してみますと、実験設備(機器のみ)は良く整備 されていてアメリカに似ていますが、学生は遊びに忙し いオーストラリアに、そして事務手続はや、煩雑なギリ シアに似ているように感じます。

私のここでの研究は、大変順調に進行しており満足し ております。研究以外のことでも、研究室の職員や学生 達から日本文化のいろいろな面について多くのことを教 えられました。この点に関しては私は余り良い学生であ ったとはいえませんが、それでも、このような体験は非 常に興味深く、また見聞を豊富にするものでした。現在 二年目を迎えていますが、おそらく一年目と同様楽しい 年になりそうです。



筆者プロフィール
 アタナシオス・ニコライデス
 学術振興会外国人特別研究員
 (Ph. D.)
 1962年生

Profile Athanassios NICOLAIDES JSPS Fellow (Ph. D.) Born in 1962

A One-Year-Old Impression of Mie University

I joined Prof. Tomioka's group (Chemistry Department for Materials) last year as a JSPS fellow. The main research theme of the group is related to molecules that are too reactive to be studied with conventional methods. The study of such exotic species requires the combination of several interdisciplinary skills. There are very few places in the world where such research takes place, and it is intriguing to me that Mie University is one of them.

Having finished my undergraduate studies in Greece, my Ph. D. in USA and my first post-doc in Australia

> has given me the opportunity to make some interesting comparisons between here the above countries. Technical facilities here in terms of instruments remind me of USA, students of their Australian peers and bureacracy of Greece.

研究内容紹介

生

Ø

目

学

留

わたしは中国上海から の留学生、現在は三重大 学大学院人文社会研究科 の修士課程で日本経済を 研究している。

近年では「社会主義市 場経済」を打ち出した中 国、目覚ましい経済発展 を遂げてきた中国の経済 成長、これは日本の戦後 における高度経済成長と 似ている点が多いのでは



島津ゼミのメンバー Menbers of the Class of Professor Shimazu

ないかと思われる。日本経済は言わば中国の経済発展の お手本とも言えるだろう。そのために、まず日本経済を 知ることは大切なのではないかと思われる。したがって、 わたしは日本経済がご専門の島津秀典教授の下で以下の 研究に従事している。

日本経済は、敗戦以降、劇的とも言える変化と発展を 重ね、世界資本主義の中でも例外的な発展を通じ「経済 大国」となって来たが、この現代日本経済の特徴と問題 点を解明することがわたしの研究テーマである。しかし その分析方法、分析視角は決して容易に求められるもの ではない。

分析対象は敗戦・占領から「経済大国」を経て21世紀 を迎えるまでとなっている。また、日本経済分析であり ながらも、日本経済が「冷戦」・「熱戦」を続いたアジ アにおけるアメリカのアジア戦略・対日政策の下で、経 済のみならず、社会・政治にもわたる国際的関連によっ て直接・間接に規制された。そのために、日本の国家政 策が他の資本主義諸国よりもさらに強力で、日本特有な ものとなったわけである。日本の政府、企業が国際競争 力強化を絶対視する考えのもとに外国技術の導入・改良 ・応用=開発を急激に進め、日本企業独特の管理体制・ 労使の協調的関係を形成してきたことについて、私は明 らかにして行くつもりである。

日本経済の演習やゼミナールで鋭い質問や批判を投げ かける島津秀典先生や島津ゼミの学生達に恵まれ、常に 緊張関係をもって演習やゼミナールに参加してこられた ことには感謝している。

My Studies in Japan

I am a student from Shanghai, China, and I am preparing for a Master Degree in Japanese Economy at Mie University.

Recently China has been spreading a "Socialistic Market Economy", and it has made some remarkable economical development.

I think that is similar to Japan's high-speed economic growth after the war, and it is said that the Japanese economy is the model of the Chinese one. I think it is very important to study the Japanese economy. Now, I belong to Professor Shimazu's class that studies the Japanese economy.

My theme is the analysis of the remarkable characteristics of the modern Japanese economy. Since the war, Japan has become a"Big Economical Country", through unusually dramatic advances and changes.

The subject of my survey is the period of time from the defeat and occupation until the coming 21st Century.



筆者プロフィール
陳 正樑
大学院人文社会科学研究科修士課程
1年生(中国より留学)
1965年生

Profile CHEN ZHENG LIANG

Senior Student of Master Course, Graduate School of Humanities and Social Sciences (From China) Born in 1965

肺塞栓症国際シンポジウム・三重会議 International Symposium on Pulmonary Embolism in Mie

日時:

1998年4月18日 場所: 四日市都ホテル 四日市市安島1-3-38 **講演者:** アメリカ、フランス、カナダ、日本から計15名 参加費:10,000円 代表者: 三重大学医学部 中野 赳 ハーバード大学医学部 Samuel Z. Goldhaber

問い合わせ先:

〒514-8507 津市江戸橋2丁目174 三重大学医学部第一内科 電話:059-231-5015 Fax:059-231-5201 Date : 18th April 1998 Venue : Yokkaichi Miyako Hotel 1-3-38 Yasujima, Yokkaichi, Mie 510, Japan Presentators : 15 Invited Speakers from USA, France, Canada and Japan Open to the Public : Registration Free : 10,000 yen Coordinator: Prof. Takeshi NAKANO Mie University School of Medicine Prof. Samuel Z. Goldhaber Harvard Medical School Office : 2-174 Edobashi, Tsu, Mie 514-8507, Japan The First Department of Internal Medicine, Mie University Faculty of Medicine Phone : 059-231-5015 Fax : 059-231-5201

第29回日本膵臓学会大会 1998年日本消化器関連学会週間

The 29th Annual Congress of Japan Pancreas Society Digestive Disease Week-Japan 1998 (DDW-Japan 1998)

日時:

1998年4月15日~18日 第29回日本膵臓学会はDDW-Japan1998(膵臓学会、 消化器内視鏡学会、肝臓学会、消化器病学会、胆道学 会の5学会が全面参加)の一環として開催されます。 会期の前半(15、16日)に膵臓の演題が集中します。 場所: パシフィコ横浜、横浜市 招待講演者: 膵臓学会として米国1名、日本1名 (DDW-Japan1998では欧米より10~20名) 参加費 (DDW-Japan1998として): 20,000円(事前登録平成10年3月6日まで) 25,000円(平成10年3月7日以降) 代表者: 三重大学医学部第1外科教授 川原田嘉文 問い合わせ先: 〒514-8507 津市江戸橋 2-174

〒514-8507 津市江戸橋 2-174 三重大学医学部第1外科 電話:059-232-1111 Fax:059-232-8095

Date :

15-18, April 1998 (The 29th annual congress of Japan Pancreas Society will be held during the period of DDW-Japan 1998) Venue : Pacifico Yokohama, Yokohama City Presentators : Two invited speakers from USA and Japan (DDW-Japan 1998 invites $10 \sim 20$ speakers from USA and Europe) Open to the Public (DDW-Japan 1998) : Pre-registration fees : 20,000 yen (before 6 March, 1998)Registration fees: 25,000 yen (after 7 March, 1998) Coordinator : Prof. Yoshifumi KAWARADA First Department of Surgery, Mie University School of Medicine Office : 2-174 Edobashi, Tsu, Mie, 514-8507, Japan First Department of Surgery, Mie University Faculty of Medicine Phone : 059-232-1111 Fax : 059-232-8095



鳥羽 ГОВА

大学 概 要

^{平成9年12月} 編集発行 三重大学広報委員会